



6月のさろんテーマ

福島を視つめる

【ゲスト】大石芳野さん（写真家 NPO スローライフジャパン理事）

大石芳野さんは、日本大学芸術学部写真学科を卒業後、ドキュメンタリー写真に携わってきた。戦争や内乱、急速な社会の変容によって傷つけられ苦悩しながらも逞しく生きる人びとの姿をカメラとペンで追っている。福島をどう視つめたのでしょうか。（以下、講演要約）

■広島の50倍の放射能

福島で放射能がどれくらいでたのかを想像しても、なかなかわからない。広島も、ビキニも、チェルノブイリも、それぞれの爆発で拡散された放射性物質の中身は、違うといえます。

でも、たとえば広島を1とすると、福島は50倍です。それだけの放射能が福島に飛び散りました。

因みにチェルノブイリは広島を1とすると350～400倍。福島の7倍の汚染度でした。

■“よい言葉”を信じようとした

私もチェルノブイリに行きましたが、ウクライナ、ベラルーシ、ロシアの子供たちは大変強い影響を受けた。学校の先生によると、以前は子供たちが風邪を引いても長くて1週間休めば出てきたが、最近は1か月休む子供が多い。現地を歩いていて葬式に会うと、「昔だって葬式はあったが、年寄の葬式だった。今は若い人の葬式が多くなった」と地元の人が言い合っているのを聞きました。

日本には原発への安全神話がある。日本は絶対大丈夫、チェルノブイリのようないい加減な事故は起こらないと為政者たちは言ってきました。事故の前には「原発は地震や津波で危ない」と言われていたのに東京電力は無視し、そこに3.11の事故が起こってしまった。

私たちは“よい言葉”を信じてきた。もしかすると危険かもしれないと考えた人はいたが、圧倒的多数の人は考えようとしなかった。私もチェルノブイリを取材し非常に不安を感じていたのに、その声が小さくて届かなかったことに、忸怩たる思いがあります。

人間は、“大丈夫だ”という方に、ついつい考えてしまう。それが福島の事故を起こしてしまった。今も警鈴が鳴らされていますが、大丈夫だろうと再稼働に進もうとしている。そのうえ外国に輸出されようとしている。今の指導層は経済的に儲けることに一生懸命と私には思えます。

■土が汚された、人生を大きく変えられた…

福島の事故に対して、福島の人は原発で危険手当としてのお金をもらっていた。だから危険な目にあっては仕方がないという人がいる。でも、それは人生を捧げるほどの金額なのか。子や孫の人生を奪うだけの額をもらっていた

のだろうか。否ですね。しかも、まったくもらっていない人も県内には大勢いる。むしろ圧倒的に多い。

私が福島に最初に行ったのは爆発から1年半過ぎた頃です。最初に感じたのは“土”が汚されたということです。ふるさとが土が汚され、そこから逃げなければならない。ふるさとにもう、住むことができない。それを、みんなが強く思っている。それを感じました。

それから3年過ぎて、土を汚されて人生を大きく変えなければならなくなった彼らの思いは、残念ながら、全然変わっていない。状況は、変わっていないのです。

■一人一人の人間を見ていない

私が撮った写真のスライドを映しながらお話したいと思います。私は放射線の汚染が強いところに行きました。その60歳の男性は自分の人生すべてが否定されて、これからは田んぼができないと大声で泣いていました。

南相馬市の女子高生は将来が不安、結婚や子供は大丈夫か心配しながらも、前向きに生きたいと話していました。人を見ると寄ってくる、置いていかれた犬。ダチョウ園から逃げ出した、哀しそうな眼をしたダチョウ君。

歌人で農業している佐藤さん。原発に反対で、2002年に「いつ爆ぜむ 青白き光を深く秘め 原子炉6基の白亜列なる」と詠んでいました。

息子が継いでくれるので頑張るという酪農家は、原発はよくないと牛舎の屋根にソーラーパネルをつけて自家発電、売電もしているといっていました。全村避難の旅館村で今も自分の家に残って、犬を飼っている老夫婦。

川内村で江戸時代から続く農家は、作ってはいけない田んぼでコメを作っています。計るとベクレルは標準以下なのに、作ってはいけない区域なので、お米が立派にできて捨てさせられる。それでも毎年作っています。

また、立入禁止の警戒区域を守っているのが、これから結婚子供を持つだろう若い警官だった。60歳くらいの人でもよいのに。それを見て、国は一人一人の人間のことなどなにも考えていない、福島県の人々の事もほとんど考えていないのだらうと思いました。

■写真集「福島 FUKUSIMA 土と生きる」

私が福島で撮った写真を「福島 FUKUSIMA 土と生きる」と題して出版しました。放射線は見えないから、あるといわれると怖くなる、ないといわれると安心する。見えないために原発の再稼働も進んでいきそうで情けない思いです。

そうならないように、福島の人たちが一生懸命生きていくことを、お伝えしようとしています。

(2014年6月17日)